

記者 「小林さんが被爆前、附属医専の学生のころはどんな生活だったんですか？」

小林さん 「私が入学したのは昭和18年ですから、まだ、その、戦争はまだ勝ってるというのかな。

18年はまだ関釜連絡船が通ってましたから、夏休みに釜山まで帰ったんですよ。本籍地が長崎でしたからね。野母ってところがありますね。野母半島の野母岬。あそこが祖母の故郷だったんです。親せきの者がいたんですね。だから野母にはときどき船、まだその頃はバスが通ってなかったから船で、行ったんですよ。行ったり来たりしたんですよ。で、私の下宿は台場町、今はないでしょ。長崎の駅の前の大黒町の隣に小さな町があつてね。中町の天主堂からずっと駅の方に降りてきた道なんですけどね。そこに下宿があつて、その下宿の御主人っていうのが野母半島の出身で、野母の出身者をあの、下宿させて。だからみんな遠い親せきになるもんばかり集まって。だから18年はですね。学生生活というのはまだよかったですよ。私も寺町が好きでね。寺町から螢茶屋に歩いてよく散歩したですね」

記者 「そして昭和20年8月を迎えたんですね」

小林さん 「普通入学したときは4年制だったんですよ。だけど2年半で卒業させて、すぐ戦地へ行かせるということで、20年の8月は卒業試験だったんですよ。卒業試験の真っ最中。そして10月には軍隊へ入るという予定だったんですよ。だから、釜山の自宅の方では軍刀を買ってね、用意してたみたいですよ」

記者 「8月9日の前にも大学病院に爆弾が落ちてますね」

小林さん 「そうなんですよ。8月の1日は、僕ともう一人で、ちょっと年輩の同級生なんですけど、屋上へ上がってますね。監視をしてたんですよ。そしたらどこになるんですかね、金比羅山の続きですかね。長崎駅の裏、あの陰からばーっと艦載機が飛んできましたね。それで友達が「あぶない」って言ってすぐ下へ降りて、2階まで降りてきたらちょうど内科病棟のところで爆発をしたんですね。だから艦載機から爆弾を落とされるのがみえたんですよ。その経験がありますね。1回だけですけど」

記者 「長崎原爆の前に、広島原爆の話が聞かれています、そのときはどんな風を感じましたか？」

小林さん 「想像つきませんからね、被害が。ただ新型爆弾っていう風に伺って、『そういうひどいのあるのかな』と想像つきませんからね。今までわたし達は爆弾や焼夷弾っていうのが落ちたときのことしか知りませんからね。そんな爆弾が、そう思っただけですよ。そんなに詳しいっていう話ではなかったですね。ただその建物がこう、けが、負傷者についての報告はなかったですね。ただ一面焼け野原という風ですね」

記者 「8月9日は朝からどのように過ごされていましたか？」

小林さん 「朝はいつも通りね。朝は普通のサツマイモが主食みたいなかんじでしたから、7時半頃かな。歩いて、電車乗りませんから、歩いて病院まで行きました。まだ空襲警報が出てましたから、病棟で学生のいわゆる防空隊っていいですか、婦人科の病棟へおったんです。そしたら空襲警報が解除になりましたして警戒警報になりました。そしたら外来で診察を始めるかな。あるいは口頭試問するかなということで外来病棟に行ったわけです。

記者 「防空隊というのはどういうことをしていたんですか？」

小林さん 「いや、あの、一部屋みんなが集まってね、いわゆるだべっていたっていうか」

記者 「何かあれば出動する、という」

小林さん 「そうそう。たとえば入院している患者さんを誘導したりなんかというのが。僕等はあとでその部屋にいったら弁当箱は真っ黒けになってましたからね。ほいで、その産婦人科の内藤先生っていう教授は、そこで即死をしてますよね。だから、もし僕がその部屋にずっとおったら無事ではいなかっただろう。外来病棟に行ったのが結構よかったですよ」

記者 「その部屋を出てどうされたんですか？」

小林さん 「婦人科の外来の診察があって、そのあと口頭試問だったんです。それであの、私が出たのは、壁が背中だったんですよね。壁を背中にして、窓硝子は本田講師っていう先生が、背中を窓硝子の方に。だから私は窓に向けて後が壁だったんですね。そうするといわゆるピカドンのピカが窓硝子にぱっと光ったので、素早く大きい机があったからその下に潜り込んだんです」

記者 「そのとき何人くらいが部屋にいたんですか？」

小林さん 「えっと5、6人がグループですわ。だから、あいうえお順でグループが分かれてるんですよね。だからその、グループの運命がね。いい場所におったのは生き残ったし、あるいは近い方、木造の建物、精神科は木造でしたから、そういうところにおった人はみな、亡くなった。ただね、いわゆる放射線っていうのは感受性があるんですね。その本人の。だから僕は放射線に対する感受性が鈍かったと思うんですよ。日本原水協の理事長をしている澤田先生という名古屋大学の名誉教授ね、その先生がこの間話しに来てくださって、やはり感受性のことを。澤田先生は広島で被爆したんですけど、お母さんは建物の下敷きになって亡くなられてるんですね。それで火が回ってきて、お母さんは『おまえだけ早く逃げろ』っていうことで、澤田先生はお母さんが焼け死ぬのをそのまま逃げられて。その先生が大阪にこの間いらして話をしたときに、感受性が鈍かったから今でも元気にしてらっしゃる」

記者 「原爆の閃光というのはどんな風だったんでしょう？」

小林さん 「目の前で今、フラッシュがありますけど。昔はこんなしてマグネシウムをば一とこんなして（撮影するんですね）そんな感じですよ。だからその、僕は窓の方を見てましたから、その瞬間をぱっと潜ることができたんですけど、後側におったらちょっと遅れたかもわかんないですよ」

記者 「そのときはそれが何かわかりましたか？」

小林さん 「いや、わかんないですよ。爆弾ともなんともわかんない。ただ、一瞬。それは本能的なものでしょうね。だからそのときに外へぱっと逃げ出したものがおったんです。その人たちは結局天井が崩れたり何だりして怪我をした。僕はじっとして、それで明るくなってくるまで、その下にじっと潜り込んでた。だから僕は明るくなって外に出ようと思ったときは、誰もいなかった。誰もいなかった。みな逃げ出すでしょ。私は音が静まってだんだん明るくなって、それから逃げ出したから。だから僕が逃げ出したのは遅かったと思うんですよね。それでまあ、廊下に出たら永井隆先生やら（看護婦長の）久松（シソノ）さんが、永井先生がこう包帯を巻いて出て来られたのをぱっと会って。そのときは、いわゆる病院の廊下がありまして、これは壊してたんですね。そこは火が出てばたばた燃えてるし、後下の方で、助けてくれ助けてくれって声がして。それで僕は廊下を

2階でしたから、非常出口の方へ崩れたあれを掻き分けながら、足を非常口から出そうとしたら非常口の階段がないんですよ。爆心地側ですからね。吹っ飛んでしまって。あ、と思ってまた引き返して、そして、中央の階段を下りてきたら、玄関の前に負傷者がいっぱい。坂元町の町民がたくさん逃げてきて、それはあれですよ。ばたばた倒れながらとか、いわゆる被爆者の悲惨な髪はぼーぼーになって、っていう風な状況の中で逃げてくるわけですよ。そして玄関が少し広がってましたから、そこへ学生やら看護師やらそこに逃げてくるわけです。そして下の坂本町は火の海です。トタン屋根がぼんぼん吹き上がって火の海だったです。それで病院の玄関、ここにおったら危ないと言うことで、少し丘になってますから、そこへみんな連れて上がって行ったんですよ」

記者 「永井隆博士はどんな様子でしたか」

小林さん「あのここの側頭動脈が切れてましてね、部屋の方で包帯巻いたりして手でこう押さえて、久松婦長さんの肩をこうして、出て来られた」

記者 「言葉は交わしましたか？」

小林さん「言葉は交わさなかった。そんな余裕は全然ないですよ。ただ自分が逃げるっていうことだけでしょうね」

記者 「原爆投下の時、音はしましたか？」

小林さん「そうですね。それはあの、どーんと、建物が崩れる音と一緒にあってね。わ〜っと。です」

記者 「建物が崩れてくるのは見えましたか？」

小林さん「見てませんよ、崩れてるのは。ただ、頭の上にわ〜っと落ちて来るじゃないですか。それが自分の体の上へ当たるかどうか、そこはもうどうやったのかというのは、今もあまり覚えてませんけど。ただじつとうずくまって、それは恐怖っていいですかね。ただ一種のショック状態でしょうね。だからあとで思い出そうとしてもね、よく覚えてませんね。その時のことは。だけど僕が外に出たのは遅かった方でしょうね。そいで明るくなって」

記者 「それまでは暗かった？」

小林さん「そうですね。そりゃあ、建物が崩れてこんななるんだから真っ暗ですよ。電気は消えるし」

記者 「病院の外に出たときは、どんな様子だったんでしょう？」

小林さん「裏の山にね。下の方は火の海ですから。横で、『助けてくれ』とか、あるいは『水をくれ』とか、声ばかりで、みんな意識をなくしたのか、そこにばたんとそこに伏せたまま。あとみんな『水をくれ、水をくれ』というから、『水を飲んだら死ぬぞ』、と言いながら、病院の玄関のところに防火水槽がありましてね。それは青くなってましたけど、それを鉄兜ですくって、かわいそうだから少し飲ましたりしましたけど。この間、中学校に行って話をした時に、『水を飲んだらなぜ死ぬのか』という質問があって。僕は化学的にどうかというのはよう説明しなかったけど。考えれば、いわゆる死期の水、そういうので、水を飲んだら死ぬぞ、と言っていたんじゃないでしょうかね。血を出してる人たちには、わたし達は白衣を着てましたから、それを破ってちょっと包帯代わりみたいにして、おきましたけど。だから結局真っ裸になりましたよ。上は。結局友達がどっかから国防服の上衣を持ってきてくれましてね。どこか死んだ方がそこにあったん

でしょうかね。持ってきてくれて。それを着てあとずっと過ごしました」

記者 「そのあと永井博士の指示で立山に行かれたんですね？」

小林さん 「そうそう。永井隆先生が『けがをしてないものがいたら、県の防空本部に連絡に行ってくれ』、と。大学もいわゆる壊滅状態ですから、救護隊ですか。長崎大学は長崎の救護隊の中心でしたから、大学病院は全滅ですよ、ということで、裏を上がって金比羅さんの尾根伝いで諏訪神社まで降りて行って」

記者 「お一人で？」

小林さん 「いや、同級生がいたんです。その2人でそこをまあかけ降りるといえるか、途中は負傷者がいっぱい行列で逃げていくんですよね。それでお諏訪さんに行ったら、向こうの伊良林とかあっちのほうに逃げられるから。だから大学の病院にいた連中っていうのは、みんな裏に上がって逃げていったと思うんですよ。下は火の海ですからね」

記者 「その途中どんなことを考えていましたか」

小林さん 「何も想像できないですよ。そんなには何にも分からない。とにかく『うわ、すごいな』というだけです」

記者 「防空本部では何をしたんですか？」

小林さん 「その同級生というのが、割に軍隊の連中やらとあれでしたから、彼が中心になって病院の状況を話して、僕はただついていいただけですね。それで、そこでそういう話をして、とにかく食料がほしいといって乾パンをね。警防団の人たちと一緒に、螢茶屋行きの線路道があるでしょ。あれ伝いに大学病院までまた帰ったわけですよ。それで病院に帰って、負傷者の人たちに、ずっとそれを配って回ったんですね」

記者 「帰りは長崎駅のほうを回って歩いているわけですよね？そのあたりはどんな感じだったのでしょうか？」

小林さん 「歩きましたね。自宅は台場町ですから、駅のすぐ近くですから、燃えてもう全然焼け野原。もう死体やら転がってたと思いますね。あ、死んでるなど思っただけ。いろんなことを考えるあれっていうのはありませんでしたよ。病院に帰らないかとそれだけです」

記者 「帰ってきたのは何時くらいだったんですか？」

小林さん 「少し薄暗くなってましたからね。8月ですから。6時くらいですかね。だから病院、いや、あの県の本部を出たのが4時くらいでしょうかね」

記者 「大学病院の裏に戻ってきてからはどうされたんですか？」

小林さん 「そこでね、結局はたくさんばたばたと横になっている人たちと、わりに怪我をしていない僕たちと永井隆先生とで、その畑で生えてたサツマイモとかカボチャとか、そういうのを取って鉄兜にそれを炊いてそれで食べましてね。朝から何も食べてないからね。僕はおいしいなと思って食べたんですけど、もうすでにそのときにそれを食べて吐く、吐いて嘔吐したりしてましたからね。その連中はみんな翌日から翌々日に亡くなりましたからね」

記者 「その晩は永井博士たちと一緒に過ごされた？」

小林さん 「そうですね。それでそのときに永井隆先生を囲んでいっしょに食べた。そのときに永井隆先生は原爆だぞ、ということをお話されたんですけど。もう僕たちは理解できないからね。『はあ』と思ってただ聞いてるだけですね。そのうちに、そこに裏山に逃げてきた学

生たちが「海行かば」の歌を歌い始めてね。ご存知ですか？「うみゆかば・・・」この歌を、下はまだ燃えてるのを山の上から呆然と見ながらですね、1人歌い出したら、それが合唱みたいになって」

記者 「裏山にはどのくらいの人がいたんですか？」

小林さん 「いや、どれくらいいたかわからない。結局ね、大学で死んだ職員・看護婦・学生っていうのは892名かな。それは、そこにいた人じゃなくて、あとで逃げて帰って亡くなった方もいますから。そこにいたのはそんなにあれはないんじゃないでしょうかね。それで下の住民の方は、あとで調外科で統計取ったら100%死亡ですよ。だから坂本町は木造の建物ばかりですから。放射線もたくさん浴びてて」

記者 「病院の裏というのは広い場所だったんですか？」

小林さん 「広いというか段々畑みたいな格好ですよ。畑といっても狭いあれですから。だから2日目朝は、結局は、大学の中や病院の中がどういう風になったのか、もし薬があったら探してこいとかね、基礎教室はほとんど全滅状態ですけど、行方不明の先生方やなんか探してこいとかいうふうなことで、いわゆる病院から、それから大学の方から薬専ね、薬学専門部までずっと探しに行ったりなんかして。それでそのままですね。あの、もう1日そこへずっとおって、その日の晩は薬専の防空壕がありまして、そこでまた一晩寝ました」

記者 「薬を取りに行った時に見た病院の内部は？」

小林さん 「もうあの写真に出てる通りですよ。建物は崩れ落ちてるし、とにかく図書室はひと晩じゅう焼けてましたからね。だから病院の中はみな焼けてしまってるという状態です。案外、地下室やなんかは燃えないで」

記者 「薬はあったんですか？」

小林さん 「薬は何にも見つかりませんでしたよ。いわゆるサルバルサンとか、そういうサルバルサンっていうのは梅毒の治療薬ですよ。そういう役に立たないような薬ばかり。それでね、後から、みんなから聞いたあれ（話）では、早くもう盗んでいったと、薬や薬品やあれはみんな盗まれてる。だから僕の友人も言ってましたけど、いわゆる調理室の方へ、お米がたくさん焼けないで残っていたそうですよ。それを盗んでいこうとする人たちがおっただらいいですよ。だからああいう騒動の中で、そういうことをする人たちがいたっていうこと。ちょっと僕なんかも考え付かんのですけどね」

記者 「基礎キャンパスのほうはどうだったんですか？」

小林さん 「いわゆる学生の講義を受ける講堂っていうのは全部木造だったんです。爆心地から500メートルですから、一瞬にして潰れてすぐ火が出て、結局そのままみんな下敷きになって、それで焼け死ぬ。で、結局そのあとは骨がずらっとそのまま並んでね。基礎教室にいたのは、まあ大学の学部の方、附属医専の1年生2年生ですね。僕たちは3年生で、みな病院の方に行っていましたから。だから、病院の方にいた者は、調先生の統計では40何%でしょ、死亡率は。で、基礎教室にいたのは100%死亡ですよ。それだけ建物の違いっていうか、あれやね。基礎教室は500メートルでしょ。病院の方は700メートルだから、200メートルの距離の差、それから建物のコンクリートの建物と木造の建物とそれだけ死亡率が違ってくる」

記者 「教室を出る時はもう誰もいなかったんですよね？」

小林さん「そうですね。もう、みんな逃げるのはどういったらいいんでしょうか、みんなばらばらですよ、だから、たとえば小児科の先生がいらっしゃって、小児科の病棟って言うのは裏門の方でして、大学に近い方なんです。そこでえらい負傷していらしたんですけど、お元気で逃げられて鹿児島に、本籍が鹿児島だったんでしょうけど、そこでだいぶん長生きされたんですよ。そこで被爆者の会の会長をされたりしてね。それで、角尾先生、学長ですけど、学長は、あとで道ノ尾に調先生の救護所ができて、僕もそこに行ったんですけど、そこで21日かな、亡くなられたんですけど。場所はですね、たとえば外来の病棟ですけど、こういう風に少しコの字型に曲がってるんですよ。ここに廊下があったんですけど、ここは木造でしたけど、真ん中に廊下がこうあるんですよ。それで角尾学長がいらしたのはここですよ。爆心地はこっちなんです。この部屋。廊下を挟んで南側の部屋にいたのは助かってるんですよ」

記者 「小林さんはどのあたりに？」

小林さん「私はここ、曲がったところ。永井先生たちはこっち。だからここはみんな壁がありますからね。放射線っていうのは真っ直ぐ進みますからね。この壁があると、ある程度吸収されるんです。私がいたのはここで、おまけに部屋がこうありまして、こっちに窓ですね。こっちは壁でしょ。放射線はこうくるわけですから。窓側にいた先生は、爆風で全部窓ガラスが割れますから、背中にガラスで負傷してますよね。だからこの壁でだいぶん放射線は吸収されてる。おまけに曲がってますからね。僕は感受性が低かったとしても場所としては非常によかったです。たとえば、角尾先生がおられたこの部屋で、先生はこっち側におられて放射線は直接当たりますよね。ただ部屋の中にいた1人だけ助かった人がいる。同じ部屋の中にいて、みんな死んだかというのとたった1人だけ逃げ出した。だからね、結局放射線に対する感受性が低かったかどうかですね。それからいわゆる熱線を浴びたかどうか。ガラスで負傷してないか、そういう身体状況というのがある程度影響する。だから人の運命というのは紙一重というか、運命というのが非常に大きく作用しているんじゃないでしょうかね」

記者 「被爆後の症状はどうだったんでしょう？」

小林さん「怪我ひとつしてないというのがね。いわゆる急性症状がみんなある程度出ますけど、私は下痢と血便だけなんです。それだけで済んでしまったんですよ。そのあとは普通は発熱をすとか嘔吐をすとか、それから何と言いますか、経ってきますと、紫斑が出たり頭の毛が抜けたりとか、そういう急性症状がどんどん出てくるんですよ」

記者 「その後、救護所に移られたんですよね？」

小林さん「それはね。あの、軍隊が既に来てますよね。佐世保やらあちこちから軍隊が救助に入ってきてるんですけど、(外科の)調来助先生がその人たちに頼んで、ちょうど道ノ尾のほうに疎開されていたんですね。そこでいわゆる大神宮といいますかね、部屋を借りてはって、それで大学の看護婦、教授、それから学生をそこへトラック1台借りて3日目にそこにですね、連れて行ったんです。来い、じゃなくて僕も一緒に。だから2つに分かれたんですよ。永井隆先生についていく連中と調先生について行くものと、2つに分かれましてね」

記者 「それはどうやって分けたんですか？」

小林さん「それは特別分けるという感じではなくて、なんかの調子でそっちについて行ったという

感じでね。トラックの後の荷台に負傷者なんか3~40人いましたかね。結局積み重ねたみたいにして乗せてそこまで行って。それで僕はそのあとですね、負傷者をそこに収容して、長与まで歩いて帰ったんですよ。長与に、野母の下宿の連中が避難場所として長与に場所を決めてましたから、そこに2時間くらいかけて歩いて行きました。長与までね、道ノ尾からね。そしたら3日目でしたからね、もう死んでるだろうと。大学が中心だったから死んでると思っていたら、僕がひょこっと帰ってきたものだから、みんな喜んでね。翌日くらいから僕は道ノ尾の救護所へ通った」

記者 「救護所には長与から通ったんですか？」

小林さん 「そのところがね、僕ははっきりしないんですよ。通ったのか、あるいはそこに寝泊まりしていたのか。調先生の手記を見るとそこにそのまま泊まっていたみたいですね」

記者 「救護所というのはどんなところだったんですか？」

小林さん 「ただ、だだっ広いだけです。そこにみんな横にならして。ほとんどみんな怪我してます。僕なんか、学生で怪我をしてない5、6人がそこを手伝っていた」

記者 「医者は調先生だけだったんですか？」

小林さん 「もう1人助教授の方がいらっしゃいましたね。あとは学生はまだ医師の免許証は何も持っていないので。ただしかし、薬はほとんどないし、ただ火傷にはチンク油というか、白いこう塗るだけです。怪我をした人たちには、いわゆるリバノールガーゼっていうのか、付け替えるだけです。あとはその火傷をした人たちにウジ虫がわくんですね。ハエが止まってたまごを産んでウジ虫がわくんですね。痛いらしいですよ。それを僕なんかはピンセットやお箸でそのウジ虫をとって、そのうちもう負傷者たちばたばた死んでいきますからね。それを、僕が、少し横にあった空き地に運んで、積み重ねて油を撒いて焼くんです。そういう状態が結局17日までですかね。アメリカ軍が上陸してくるからという風なことで、看護婦たちが家に帰らせてくれっていうので、あの頃はアメリカ軍が上陸してきたらみんな殺されるといってましたから、それじゃ皆帰れということで解散になりました」

記者 「救護所には薬はあったんですか？」

小林さん 「調先生が疎開先からちょっと（持ってきた）薬やなんかと、軍隊が持ってきた薬を少し分けてもらって。つまり原爆というのを何も分かりませんから。下痢をして血便をする人は、これは赤痢が流行ってきたという風に、伝染病だという風に、まだ原爆というのは何も分かってないですから。それでどんな治療をしたらいいかも分からない。だから、ただそういう戦地でのあれと一緒にですよ」

記者 「そのときはどんなことを考えながら救護をしていたんでしょうか？」

小林さん 「どういう考えはしてませんよ。ただ本能的にすることをした。考えながらは何もしてない。僕の頭は単純だったのでしょうかね。思い出せない。もうただ漫然と日々がすぎていくだけで、考えるっていうことをあまりしてないみたいですね。僕は。他の人はいろいろ考えてるんだけど。いま思い出そうとしても、忘れてるのかもしれないけど、考えるっていうのはなかったですね。一種のショック状態というのが続いていたんでしょうね」

記者 「救護所が解散になってからはどうされたんですか？」

小林さん 「野母へ行って、親せきもいましたから、野母はお魚がよく取れてましたから、魚を食べ

てただ寝るだけです。それで時々散歩をしたりして、そのころはそんなに悪くはなかったと思うんですよ。だから結局さっきから言いますけど、放射線に対する感受性が鈍かったというかね、だから急性症状もあまり出なかったってことでしょうね」

記者 「同級生がその後どうなったかは？」

小林さん 「分からなかったですね。ただあの、みんなあとはばらばらですからね。他所に逃げていった連中がどうなったかっていうのはまったく分からなくて、あとはあの、友達と会った時に『あいつは死んだぞ』という風にちょっと聞くだけで、『あれも死んだかな』で。名簿を見ますとね、グループ毎にね。ただグループがどこにいたかはね、覚えてないんですよ。ただ精神科にいた連中は木造だったから、あかんかった、そのほかの連中はね、内科の病棟ですね。いわゆる婦人科の外来のところとその横は景浦内科やら内科の病棟とか診察室がずっと並んでいたから、そこにいた連中は怪我だけですんで割にみんな元気にしてますね」

記者 「終戦後は長崎を離れて？」

小林さん 「そうなんです。僕は結局、長崎は早く離れましたから。20年に原爆にあいまして、廃校になって昭和22年から24年まで東京に転校しまして、そのあとインターンで大村の国立病院でしまして。みんなばらばらで、僕は東京大学に行ったんですけど、あとは大阪大学とか、遠いところでは岩手医専とかね、全国ばらばらに散らばってしまったんですよ。あるいは九大にいった連中もいるし。それでインターンを1年して、国家試験を受けて合格して、そのあと医師免許証をもらって僕はそのままインターンをした大村の国立病院で1年間。私は引揚者だから。本籍は長崎ですけど、実際に生まれたのは韓国の釜山ですから。一度はあの、母親やない、父親と姉が私を探しに来たのが8月の終わりか9月ですよ。それで、生きてるかということで、いっぺん釜山に帰ろうということで、みんな引き上げてくる時にいっかい釜山に帰ったんですよ。逆にね。それは何故かという、朝鮮郵船という会社がありましてね、その支店長は私の家の前で、その息子が私と小学校中学校と同級生だったんですよ。で、その支店長に頼んでね、引揚者が乗ってそのまま帰る時にのせてもらったんですよ。それで釜山に帰ってですね、そこで1か月半ほどおりましたかね。それで母親が顔色が真っ青だということで、たぶん貧血やら血液のあれがあったでしょうから、おいしいものを食べさせてもらって、それがよかったと思いますね。それで、11月くらいに、日本人で若い連中は徴兵をするぞということで、僕は先に帰るということで、リュックいっぱい背負ってまた長崎に戻ってきました。大学は大村の国立病院に移ってましてね、そこで病棟を寮みたいにして何人か帰ってきたのを、だけど教授もだいぶ亡くなってるしということで、講義というのはあまりなくてですね。食べ物の買い出しにサツマイモの買い出しやらによく行きましたですね」

記者 「それから最終的に大阪に出て来られた」

小林さん 「僕は国立病院に勤務してましたけど給料が安いんですよ。あのころ30円くらいでしたかね。引き揚げ者でしょ。だから父親が職業が何もなしで、お金もあのときは制限されてて1000円くらいしか持ってこられないで、私長男でしたから、家族を養っていかなければいけなくて」

記者 「被爆者医療に携わるようになったのは大阪に来てこられてからですよ？」



小林さん「ここに来るまでは原爆のあれっていうのは知らなかった。たとえばね、昭和31年ですか、原水爆禁止世界大会とかいうのが始まってきてるんですけど、ここに来たのは昭和35年ですけど、ちょうど安保闘争のとき、京都と大阪で原水爆禁止世界大会があったことがあって、第10回です。その時に、病院の事務長がそこに行って、被爆者の救援というのが大変遅れてる。先生も被爆してるのであれば、被爆者の医療というのをやってみたらどうですか？と言われてね。それからちょっとどんな風な状況になってるのかということで、長崎の原爆病院に行ったり、広島病院とか福岡の国立病院とか、そういう風なところで聞いて回ったんですけど、どこも被爆者の救援運動というのは何もできてなかった。それで広島に行った時に、結局うちみたいところに田坂先生という先生がいて、被爆者の健診をね、無料でずっとしてらして。そういう運動の仕方があるんだと思って、私も無料健診とか2世の健診とかをここで始めたんです。そうしますと、大阪で被爆者の会があちこちできてましてね、結局ここで被爆者の名簿を何とか手に入れて、ここで被爆者の会をつくったわけです。それで大阪市の被爆者の会というのがありまして、そこに入りましてね。そこでいきなり会長をしてくれということで、そこで医療相談というのを始めまして。そうしてそこでいろいろ相談してましたら、結局診察をせないけんようになって、そこの相談をやめてこっちに来るようにしたんですね。それで、大阪はちょっと被爆者の団体というのが複雑でしてね。それで、いわゆる被団協という日本被団協というのが東京にありますけど、全国各都道府県1つずつあるんですけど、長崎も時々分裂してましたね。広島も分裂してましたんですけど、大阪もそうなんですね。だから、被団協の活動とここでの医療活動と、それから地元の被爆者の会の運動と、それといわゆる大阪の原水爆禁止協議会、そこの役員と結局そういう風なあれ(活動)をずっとしてたんですね」

記者 「どんな活動をそこで？」

小林さん「あの、被爆者のいわゆる特別措置法というのが昭和43年にできました。そしていろいろな手当が出るようになりました。それをそれぞれの地域に、こういう措置法ができて、医者診断書を出せば手当がおりますよ、と話に行ったんです。その人たちが、私たちのところに結局診断書を書いてくれ、と来るようになったんですね。それが私の被爆者の運動の中心になってきたんですね。健康管理手当を、一番多い時には、1年間に500人超えましたからね。年間。だから私が大学で話をしたように、被爆者の中へ飛び込んで、飛び込んでというか、私は自分が被爆者だからできたんであって、ほかの関係のない先生だったら被爆者の団体に入るっていうのは、ちょっと難しいと思うんですけどね。被爆者というのは、どちらかというと医療不信の考え方を持ってますからね。つまり医者が原爆のことを何も知らない。だからたとえば診断書を書いてくれと言っても、『こんなめんどくさいもの、よう書かん』と言ったり、そういう風なこと。私は自分が被爆していろんな状況を見てるし、それなりにいわゆる原爆の病気について勉強したりして、だから結局みんな私を頼りにしてきてくれるんだろうと思うんですけど」

記者 「医者も原爆のことを知らない？」

小林さん「それはね、被爆地の広島と長崎ではお医者さんがやっぱりある程度知識がありますよ。それはね、現実に自分のところに来る人は被爆してる人たちが結構たくさん来ますから。でも全国に行きますとね、ばらばらなんですよ。だからたとえば、大阪には7800

人くらいでたくさんいる。だから広島が一番多い。長崎がその次。3番目が今福岡ですか。これは長崎の人たちが多い。それから東京の方が多くなったかな。東京、大阪、大都市にみんな来る。非常に少ないところは秋田とか、青森とかそういう東北の、そういう人たちは何故かという、軍隊で広島に行ってる人。だから広島で救護にあたってた人たちがたくさんいらっしゃる。大阪でもアカツキ部隊というのが広島に行ってみて、その人たちが結局大阪でも被爆者の会を作ってる」

記者 「学校での語り部活動もしていますね？」

小林さん 「学校での講演っていうのは、その地域にそういう反核運動っていうか、そういう運動を一生懸命するところとそうじゃない学校とあります。あの原爆の実状をあまり知らない。子どもたちはね。だから、原爆の悲惨なあれっていうのはこういう感じだったよ、っていう話をして、それが結局、核兵器っていうのはこういうものだからやめなきゃいけない、ということになっていくんですよ。私は本の中の最後のほうに、子どもさんたちのあれ（感想文）を出してますけど、先生たちは話を聞いた後に子どもたちに感想文を書かせるんですよ。それを僕のところに先生がたが送ってくださるのでね。それと被爆の惨状といいますか、ああいうのを知らない人たちがまだたくさんいらっしゃる。僕は初めのうちは話だけしてたんですけど、そのうちに話すだけじゃあかんと、写真集ありますね。原爆の写真集を一緒に持って行って、それを見せながら話をするんですよ。そうすると、写真を見ると、みんなその時の建物がこうだったり、負傷者の状態が分かりますからね。だから耳で聞くだけでなく目で見ると、そういうことを一緒にしていったほうが効果があったみたいですね」

記者 「今後も活動はずっと続けていこうと？」

小林さん 「そうですね。結局僕はもう83ですからね。どの程度あと生きられるか分からないけれど、被爆者とともにというか、私の命がある限り、一緒につき合っていこう、というふうなことでね。患者さんがお見えになった時も『先生頑張ってくださいよ』ということ言われますから、なかなか被爆者の診療から外れるということはない。まあ83にもなって、ここに勤められるというのもありがたいと思ってますよ」

記者 「被爆から63年ですが、核兵器はなくなる現状をどう思われますか？」

小林さん 「アメリカにしたって、ヨーロッパにしたって、そういう運動をするのはごくわずかな人たちですよ。世界中に広がってないですよ。だから日本被団協もそうですけど、それぞれの地域で、代表が被爆者の惨状を訴えるということで、あちこちみんなで行ってますよね。だから長崎の谷口さん、被爆者の会の会長さんされてますけど、あの方の背中の傷やなんかすごいですもんね。それで皮膚がんになってますやろ。それを手術しながら。写真集に谷口さんの背中の火傷が写ってますけど、よくあれで助かったなと、元気にしてらっしゃる」

記者 「核兵器はなくなると思えますか？」

小林さん 「無理でしょうね。無理でしょう。でもそれはなくさなきゃいけない。わたし達はその運動をずっと続けていかないとだめだと思うんですよ。ただ被爆者がだんだん年をとって行って、それを伝える人はだんだん少なくなって行ってますから、63年たってますから。2つや3つで原爆の時の記憶があるかといえば、それはとてもありませんよね。だからそれを伝える人はだんだんいなくなったらどうなるのかなあと。それまでに、私た

## 小林 栄一さんインタビュー

ち生き残った人たちは、それを伝えていかないかんということでしょうね」

記者 「8月9日、というのは今でも意識されてますか？」

小林さん 「あまりそうは思ってませんよ。8月9日というのはあまり意識はしてないですよ。あれは日常的なあれだからね。8日9日というのは意識はしてないけど。なんせ日本人でも知らない人多いですよ、逆に。世界大会で、広島・長崎である時はみんなわーっと参加するけど、それぞれの地元に戻って、その運動を続けていける人はごくわずかな人たちですよ。日本の社会状況が今こんな状況でしょ。とにかく食べて生活するだけで精一杯でね。だって日本の国そのものが、政府そのものが、反核は考えてないんだから、ねえ。核兵器をなくそうということには、消極的なことしかしてないでしょ。だから国を変えなきゃ、あれですものね。本当であれば、日本の国が先頭にたって、核兵器をなくすんだということをやらないとだめだと思いますけどね」

2008年12月4日 大阪市此花区 此花診療所にて  
インタビュー担当

NHK長崎放送局 記者 中富菜津子